## 11/16 灯りで浮かぶメッセージ
### 第8回南阿蘇スターライトイルミネーション『灯篭』点灯式

昼の部　「ラブチェアー」制作作業

「第8回南阿蘇スターライトイルミネーション」（イルミネーション実行委員会主催）の点灯式が「道の駅あそ望の郷くぎの」で開催されました。

昼の部では座ると自然と寄り添う構造の「ラブチェアー」制作作業が行われ、夜の部では午後5時から地元の小・中学生が文字や絵を書いた約700個の灯篭に点灯。来場者は自分が作った灯篭を探したり水田に立てられた電飾ツリーに見入ったりしていました。

当日は熱気球の搭乗体験も行われ、上空から眺めるイルミネーションに歓声が上がっていました。

夜の部　熱気球の搭乗体験

気球で上から見た灯篭のメッセージと電飾ツリー

## 11/17 阿蘇の魅力を楽しむ旅
### 「JAPAN ECO TRACK 第3回 RIDE in ASO」（ジャパンエコトラック ライド イン 阿蘇）

スタートに臨む参加者たち

自転車やカヌーなど人力による移動手段で日本各地の豊かで多様な自然を体感し、地域の歴史や文化、人々との交流を楽しむ新しい旅の形、「ジャパンエコトラック」。

その自転車の公認ルートで、タイムを競うのではなく集団で楽しみながらサイクリングをするファンライドイベント「RIDE in ASO」が開催されました。

当日は阿蘇一周チャレンジルート（145㎞）を含む3コースに総勢120人が参加。阿蘇地域の魅力を堪能し、7カ所のエイドステーションでは新米おにぎりや、だご汁などの地元特産品が参加者全員に振る舞われました。

## 11/16 灯すあかりで思いを繋ぐ
### 「灯物語～繋ぎ～」

学生や村民、全国から寄せられたメッセージが浮かぶ灯篭

熊本地震後に始まり今年で3回目となる「灯物語」（阿蘇の灯主催）が、旧西部小学校グラウンドで開催されました。

熊本地震で黒川地区の阿蘇キャンパスが被災した東海大学農学部の学生やOBが、「地震があった事実を伝え学生と地区住民とのつながりを確かめる場になれば」と企画。学生と地区住民で一緒に作成した約500個の灯篭に灯りを点けました。

震災前に下宿を営んでいた黒川地区の女性たちによるおにぎりと温かい汁物のふるまいや、学生たちが育てたサツマイモの販売なども行われ、学生と来場者の交流が行われていました。

## 11/23 4年ぶりの御神輿と宮相撲
### 立野神社秋祭

復活した立野神社秋祭の御神輿と宮相撲

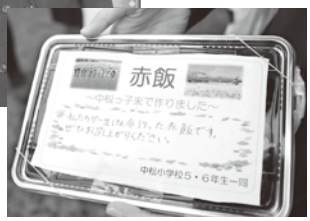
立野神社の秋祭が開催され、熊本地震以降初めてとなる御神輿と宮相撲が行われました。

当日は地域の住民だけでなく、帰省された方や地元で働いている工事関係者の方も数多く参加し、法被を身にまとって御神輿の担ぎ手としても汗を流されました。

御神輿の後の宮相撲にはたくさんの子どもたちが参加し、地域の方々の声援を受けながら一生懸命相撲を取りました。頑張った子どもたちには景品も配られ笑顔がこぼれていました。

地域の方々が心待ちにしていた祭も復活し、復興に向けた歩みをさらに実感する一日となりました。

## 11/22 一生懸命作った赤飯をどうぞ
### 地域に手作りの赤飯をお届け（中松小学校5・6年生）



一軒ずつ手渡しで配った
手作りの赤飯

中松小学校5・6年生の児童が、地域の高齢者宅87軒に手作りの赤飯を配りました。

当日は婦人会や民生委員の皆さんの手助けの下、児童たちが育てたもち米を使用して赤飯を作り、手書きのメッセージが添えられました。70歳以上の一人暮らし世帯と75歳以上の二人暮らし世帯の家を訪問した児童たちが「私たちが作りました。食べてください」と赤飯を手渡すと、地域の方は嬉しそうな笑顔を浮かべて受け取っていました。

## 12/8 よりよい阿蘇地域を考える
### 地域循環共生圏シンポジウム

分科会２のパネルディスカッションで話す吉良村長

草原景観などの地域資源を最大限活用した社会を目指す取り組みである「地域循環共生圏」についてのシンポジウム（環境省・県・村・東海大学主催）が、東海大学阿蘇実習フィールドで開催されました。

当日は関係者や村民など約100人が参加。農業や野焼きといった人の営みと深く関わる阿蘇地域の草原を維持する取り組みなどに注目し熊本地震からの創造的復興や地域との協同も踏まえ、よりよい阿蘇地域のあり方について意見交換などが行われました。

## 12/1 迅速な対応で人命救助
### 消防AED隊

素早く適切な処置で人命を救った消防AED隊員

みなみあそ復興マラソン大会中、スタートから約30分後にランナーの男性が急に意識を失い倒れる事態が発生。消防の甲斐洋次隊員が現場に駆け付け、意識、呼吸がない男性にAEDと心肺蘇生法を施しました。処置を受けた男性は待機していた救急車が到着する頃には意識を取り戻し、その後ドクターヘリで医療機関に搬送され、現在は順調に回復されています。

今回の救命事案では、大会本部によるコース内各所へのAED隊の配置、現場に居合わせた参加者の連絡や応援、適切な応急処置により、命を救う活動の連携ができました。